

# 特集

## 熊本大学病院災害医療教育研究センター教授 就任のご挨拶



熊本大学病院  
災害医療教育研究セン  
ター教授  
笠岡 俊志

令和元年七月一日付で、熊本大学病院 災害医療教育研究センター教授に就任いたしました。皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は昭和六十一年に山口大学医学部を卒業し循環器内科を主とした内科診療に従事した後、平成十一年十一月より大病院の救命救急センターにおいて救命救急医療に従事することになりました。その間、平成二十三年三月十一日に発災した東日本大震災では災害派遣医療チーム(DMAT)の一員として被災地に出動し救命医療活動に携わりました。平成十四年十月に熊本大学病院救急・総合診療部の教授に就任し、大病院のみならず熊本県の救急医療体制の発展に尽力して参りました。平成二十八年の熊本地震では、熊本大学病院における傷病者受

け入れの担当のみならず、熊本県災害医療コーディネーターとして熊本県医療救護調整本部における医療救護活動に尽力しました。この経験がその後、災害医療への関わりをさらに深めるきっかけになったと思います。

当センターは災害医療に関する教育や研究を推進するセンターとして平成三十年十月に新設されました。その目的は災害医療に従事する人材を養成するとともに、行政や地域医療との連携、市民への防災教育等を通じて災害医療提供体制の構築に貢献することです。センターが担う主な業務は、①高度災害医療人材の養成、②災害医療や災害医学に関する研究、③地域住民への防災教育、④職員に対する防災教育や災害訓練の支援などです。

特に、文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に採択された「多職種連携の災害支援を担う高度医療人材養成」事業の推進が最も重要なミッションであり、熊本地震の経験を災害医療に関わる人材養成に活かしていきたいと考えています。

平成三十一年一月より私がセンター長を兼務しておりましたが、令和元年七月より専任の教授としてセンターの業務を統括することになりました。令和元年から開始した教育プログラムの受講者数は目標の二十五名を大きく上回る七十七名となり、セミナーや研修会など活発に開

催して参りました。自然災害が多いわが国において、災害医療に関する教育や研究を通じて災害への備えに少しでも貢献できるよう尽力する決意です。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 熊本大学大学院生命科学研究部 シグナル・代謝医学講座教授 就任のご挨拶



熊本大学大学院生命科学研究部  
シグナル・代謝医学講座  
教授  
諸石 寿朗

令和二(二〇二〇)年一月一日付で、熊本大学大学院生命科学研究部シグナル・代謝医学講座教授を拝命いたしました。諸石寿朗と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

私は福岡県久留米市で生まれ育ち、ラ・サール高等学校を卒業後、九州大学医学部医学科に入学、平成二十(二〇〇八)年に同大学を卒業後、そのまま九州大学大学院の博士課程へと進学しました。私が基礎医学を志したのは、医学科六年生での基礎演習がきっかけでした。医学科の臨床実習では最先端の医療技術に心躍ることも多かったのですが、一方で、今の医療の限界を痛感させられる場面も

多くありました。そのような折に基礎研究を体験する機会があり、将来の医学の発展のために研究という形で貢献するの、一つの道と思ひ立ち、医学科を卒業後に九州大学生体防御医学研究所の中山敬一教授のもとで生命科学研究の基礎を学ぶことに致しました。学位論文は鉄代謝に関するもので、生体において鉄代謝の恒常性が保たれる仕組みを解明し、鉄代謝異常が様々な臓器の機能不全やがん、代謝性疾患などの病態に関与することを明らかにしました。

平成二十四(二〇一二)年に博士(医学)の学位を取得後、引き続き九州大学生体防御医学研究所にて一年間研究員を続け、平成二十五(二〇一三)年からは米国カリフォルニア大学サンディエゴ校で約四年半、シグナル伝達に関する研究を行いました。米国では、シヨウジョウバエにおいて臓器の大きさを制御するシグナル伝達経路として発見されたHippoシグナルの研究に没頭し、哺乳類におけるHippoシグナルの制御機構や種々の疾患との関わりを明らかにしてきました。

帰国後は平成二十九(二〇一七)年より熊本大学にて准教授として研究室を構える機会に恵まれ、これまでの研究経験を活かして、シグナル伝達や代謝制御が増殖・分化・死などの細胞運命を決定する仕組みと、その破綻による病態の解明に取り組んでいます。